小学校における性の多様性を含む性に関する指導の実践

岩瀬　千明
養護科学コース

１．はじめに

近年、性的マイノリティへの社会的関心が高まっているが、当事者の多くはいまだに生きづらさを抱えている実態がある。NPO 法人の調査[1)]によれば、性的マイノリティ当事者の 68%がいじめや暴力を受けた経験があり、その割合は学年が上がるにつれて増加する傾向にある。この要因の１つとして、思春期における友人関係が、内面的な同調性を基盤とし、異質性を排除することで集団を維持する「チャムグループ」へと変化することが挙げられる。このような発達段階において、性的マイノリティ当事者は「異質性のある者」として排除されるリスクが高いと考えられる。これまでの性的マイノリティに関する指導では、当事者のドキュメンタリー視聴などが行われ、「自分とは異なる誰かのこと」という距離を置いた認識に留まり、多様性を「自分ごと」として捉えにくい課題があった。そこで本研究では、性的指向（Sexual Orientation）、性自認（Gender Identity）、性表現（Gender Expression）の略称であり、全ての人に関わる概念である「SOGIE」に着目し、児童の性意識や友人関係の現状を把握した上で、「国際セクシュアリティ教育ガイダンス（以下、ITSE）」[2)]を基に、発達段階に応じた性の多様性に関する指導内容・方法を検討することを目的とした。

２．研究概要

本研究は、I 県の公立小学校１校を対象とした。①思春期における性意識や友人関係に関する「現状把握」を目的とした質問紙調査、②「ITSE」、学習指導要領および調査①の結果を基に構成した「指導実践」、③指導実践を評価・改善するための「事後評価」の３段階構成とした。

３．保健指導

３−１．思春期におけるこころやからだに関することや他者との関わり方についての調査

１）対象および方法

R６年度と R７年度の各年度において、I 小学校４～６年生（R６:295 名、R７:300 名）を対象に Microsoft Forms を用いた無記名自記式質問紙調査を実施した。R６年度は、回収数 277（回収率 84.4%、有効回答率 96.8%）、R７年度は、回収数 300（回収率 92.3%、有効回答率 97.7%）であった。本報告書では、学年進行に伴う性に関する意識の変化を把握することを目的とし、同一学年集団として対応づけることが可能な学年である、R６年度４・５年生と R７年度５・６年生の結果を抽出し、集団ごとの割合の比較を行った。調査項目は、基本属性、友人との日常会話、日常生活および性に関する悩み、性に関して知りたいこと、友人への同調性尺度[3)]とした。調査は無記名で行い、回答は強制ではないこと、内容は研究目的以外には一切使用せず、個人が特定されることはないことを調査対象者に調査説明書にて説明した。調査票の送信をもって同意を得たと判断した。

２）結果

（１）友人との日常会話

友人との日常会話は、５・６年生ともに「遊びや好きなこと」が９割であり最も多かった。学年進行に伴う変化として、前年度と比較して割合が顕著に増加した項目は、「SNS」が５年生 41.8%（前年度 21.2%）、６年生 46.3%（前年度 34.8%）であり、「恋愛」が５年生 36.7%（前年度 19.7%）、６年生 40.2%（前年度 30.4%）であった。

（２）日常生活における悩み

日常生活における悩みは、５・６年生ともに「学習に関すること」が５年生 43.9%、６年生 52.4%であり、最も多かった。学年進行に伴う変化として、前年度と比較して割合が顕著に増加した項目は、５年生は「自分の見た目・性格」が 36.7%（前年度 19.7%）、６年生は「両親との関わり」が 12.2%（前年度 2.2%）であった。

（３）性に関する悩み

性に関する悩みは、５・６年生ともに「体重」が５年生 26.5%、６年生 30.5%、「身長」が５年生 25.5%、６年生 35.4%で上位を占めた。学年進行に伴う変化として、前年度と比較して割合が顕著に増加した項目は、５・６年生ともに「周りの目」および「にきび」であった。「周りの目」については、５年生が 19.4%（前年度 9.1%）、６年生が 15.9%（前年度 6.5%）であった。「にきび」については、５年生が 13.3%（前年度 3.0%）、６年生が 19.5%（前年度 9.8%）であった。

（４）性に関して知りたいこと

性に関して知りたいことについては、５・６年生ともに「恋愛」および「ジェンダー」が上位を占めた。学年進行に伴う変化として、前年度と比較して割合が増加した項目は、５年生は「恋愛」が 16.3%（前年度 12.1%）、「ジェンダー」が 12.2%（前年度 9.1%）、６年生は「ジェンダー」が 14.6%（前年度 6.5%）「性に関する不安や悩みの相談場所」が 4.9%（前年度０%）であった。

（５）友人への同調性

友人への同調性の尺度得点（平均値±SD）は、５年生は男子 2.78±0.96（前年度 2.42±0.98）、女子 2.98±0.88（前年度 2.61±1.01）、６年生は男子 3.11±0.63（前年度 2.90±0.81）、女子 2.88±0.79（前年度 2.73±0.89）であった。学年進行に伴い、同調性の尺度得点は上昇する傾向を示していたが、学年差（$F=3.18\times10^{-4}$, $P= .99$, $\eta^2p=1.58\times10^{-4}$）および性差（$F=2.19$, $P= .28$, $\eta^2p= .52$）において、有意差はみられなかった。

３）考察

高学年児童は「自分の見た目・性格」や「周りの目」を過剰に意識し、自分と他者を比較して悩みやすい段階にあることが示された。「恋愛」や「ジェンダー」について学習する必要性が高まる一方、これらは従来の保健学習では十分に扱われていない。したがって、保健領域での思春期におけるからだの変化についての学習に加えて、「SOGIE」に関わるこころの変化についても発達段階に合わせた指導が必要であると考えられる。

３−２．指導実践

本実践は、「SOGIE」の概念を理解できるようにすることを目的として、４年生と５年生の各学年において、各クラス１時間ずつの指導を行った。指導内容は「ITSE」、学習指導要領および思春

期における性意識や友人関係についての調査結果（3−1）を基に構成した。指導の全体計画および「ITSE」との関連を表１に示した。

表１　指導の全体計画

	学習内容	指導上の留意点	ITSE との関連
第４学年	【ねらい】好きってどういう気持ち？ ＜導入＞ 〇思春期の悩みや不安についてのアンケート結果を確認する。 ＜展開＞ 〇「好き」の種類や理由について考える。 ・「人間関係マップ」を作成し、これまでの人間関係を振りかえる。 ・これまでの人間関係の中で、「好き」と感じた経験について、その時の気持ちと感じた理由について考える。 〇性の４つのとらえ方について知る。 ＜まとめ＞ 〇学んだ内容をもとに、好きになるとはどういうことなのかを考える。	〇周りの友人も自分と同じような悩みや不安を抱えていることが理解できるようにする。 〇人間関係の広がりを視覚的に理解できるようにする。 〇家族に対する「好き」や友人に対する「好き」などさまざまな好きがあることに気づけるようにする。 〇性はグラデーションであることや一人ひとり性が異なることが理解できるようにする。	キーコンセプト１：人間関係 トピック１．２： 友情、愛情、恋愛関係 〇キーアイデア：（９～12 歳） ・子どもが思春期を迎えると、友情や愛情はさまざまに表現される 〇学習者ができるようになること： ・成長する中で友情や愛情を他者に表現する際にさまざまな形があることを説明する（知識） ・他者に友情や愛情を表現するたくさんの方法があることを認識する（態度） ・成長する中で自分の友情や愛情を表現する方法が変化することを省察する（スキル）
第５学年	【ねらい】性についての「らしさ」ってなんだろう？ ＜導入＞ 〇「仕事カード」ゲームを行う。 ・それぞれの職業について、男性・女性のどちらがやっているかのイメージによって分類し、分類した理由を考える。 ＜展開＞ 〇「男らしさ」や「女らしさ」について考える。 ・男らしい人や女らしい人とはどんな人かを考え、男または女「なんだから」「～べきだ」「～なさい」と言われた経験について考える。 ・「思い込みメガネ」（アンコンシャス・バイアス）について理解する。 ＜まとめ＞ 〇これから人と関わるときに気をつけていきたいことについて考える。	〇「消防士は力持ち」「看護師は優しい」など職業に対するイメージと性別に対するイメージが無意識に結びついていることを認識できるようにする。 〇性別を理由としたバイアスについて自分の経験をもとに考えることで、無意識に他者を傷つけることがあることが認識できるようにする。 〇自分の「あたりまえ」や「ふつう」が他の人にとってはそうではないことについて理解できるようにする。	キーコンセプト３： ジェンダーの理解 トピック３．２：ジェンダー平等、ジェンダーステレオタイプ、ジェンダーバイアス 〇キーアイデア：（９～12 歳） ・ジェンダーステレオタイプは偏見や不平等につながる 〇学習者ができるようになること： ・ジェンダーに関するステレオタイプやバイアスを明らかにする（知識） ・ジェンダーによる違いは搾取や不平等な扱いを引き起こす可能性があること、人々が期待された規範と異なる振る舞いをした場合は特にそうであることを認識する（態度）

３−３．指導評価

１）対象および方法

対象は令和７年 12 月に保健指導を実施した５年生 100 名とし、質問紙調査は指導前後において不足なく回答した 49 名、ワークシートの記述分析は保健指導の出席者 88 名を分析対象とした。

質問紙調査は Microsoft Forms を用いた記名自記式調査票を使用し、以下の項目について検討した。授業前には野津ら[4)]の「日常生活における実践状況」（３項目：４件法）、授業後には植田[5)]の「学習過程評価」（「協力的学習」「認識」「興味・関心・意欲」「自己学習」各４項目：３件法）、これらに加え授業前後において、野津ら[4)]の「保健の学習意欲」（「感情」３項目、「価値期待」８項目：５件法）を用いて調査を行った。ワークシート分析は、記述内容を「これまでの生活を振り返ることができている」を１点、「授業で学んだ内容をもとに（１点）、これからどうしたいかを記述することができている（１点）」の各１点の計３点満点として得点化した。

分析については、指導前後の学習意欲の差を検討するために対応のある t 検定を行った。また、ワークシートの記述内容と学習意欲との関連を検討するために回帰分析を行った。学習過程評価については、各下位尺度得点の平均値の差を一元配置分散分析と多重比較により比較、検討した。

２）結果および考察

（１）学習意欲の変化

指導前後では、「感情」の全項目において、指導後の方が平均点は有意に高かった（$p<.001$）。「価値期待」においては「私の今の生活に役立つ」「心や体の不安や悩みを軽くしたり解決したりするのに役立つ」の項目で有意な向上がみられた（$p<.05$）。一方、「健康な生活を送るために重要だ」「健康な生活ができるようになる」の項目は指導後に有意に低下した（$p<.05$）。児童の多くは健康を「病気ではない状態」という狭義の意味で捉えており、良好な人間関係を築くことと WHO が定義する広義の意味での健康が結びついていない実態が示唆された。

（２）ワークシートの記述内容と学習意欲との関連

ワークシートに、これまでの生活を振り返り、学んだ内容をもとに「これからどうしたいか」を具体的に記述できた児童ほど、「心や体の不安や悩みの解決に役立つ」という学習意欲が高まる傾向が示された（$\beta=.581, p<.01$）。このことから、学んだ知識を自身の行動変容へとつなげるために考察する活動が、教育的効果を高める上で重要であることが明らかになった。

（３）学習過程評価

学習者による指導評価では、４つの各下位尺度得点の平均値は、①「協力的学習」2.74±0.39、②「認識」2.72±0.41、③「興味・関心・意欲」2.52±0.54、④「自己学習」2.61±0.41 であり、全体として有意な差がみられた（$p<.001$）。多重比較を行った結果、①と③、①と④、②と③の観点間で有意な差がみられた（$p<.05$）。これらのことから、グループワークを取り入れ、無意識のバイアスを意識化させた学習内容は有効であったといえる一方、今後は「さらに継続して学びたい」と児童が思えるような問いかけの工夫が必要であると考えられる。

４．まとめ

本研究では、小学校高学年における恋愛やジェンダーへの関心の高まりがみられた質問紙調査結果を踏まえ、SOGIE 概念を学ぶ保健指導を実践した。指導前後の学習意欲の比較から、指導後には学習への感情的意欲や「悩みの解決に役立つ」という価値期待が有意に高まり、特に、これまでの生活を振り返り、具体的な行動変容を記述した児童において学習効果が高いことが示された。一方、良好な人間関係を「健康」と結びつける認識の不足や、継続的な学習を促すための問いかけの工夫に課題がみられた。より詳細な現状把握に努めるとともに、他教科と連携した教科横断的な指導体系を構築し、発達段階に応じて継続的な性に関する指導を行うことが今後の課題である。

これらの研究成果については、以下において公表を行った。

○岩瀬千明・青柳直子．2025「小学校における性の多様性を含む性に関する指導の実践」『茨城大学教育実践研究』44, 129-142.

○岩瀬千明・青柳直子・古池雄治・布施泰子・米内麻衣．2025「性の多様性を尊重する態度形成を目指した小学校保健指導の試み」『日本学校保健学会第 71 回学術大会講演集』, 187.

引用文献

１）いのちリスペクト。ホワイトリボン・キャンペーン．2014「LGBT の学校生活に関する実態調査（2013 年）」『LGBT の学校生活に関する実態調査（2013）結果報告書』.

２）ユネスコ．2020『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】科学的根拠に基づいたアプローチ．（浅井春夫，艮香織，田代美江子ほか編）』（明石書店）.

３）松下理央・今城周造．2016「小学校高学年における友人関係が学級適応及び中学校生活予期不安に与える影響」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』18, 55-69.

４）野津有司・和唐正勝・渡邉正樹ほか．2007「全国調査による保健学習の実態と課題―児童生徒の学習状況と保護者の期待について―」『学校保健研究』49, 280-295.

５）植田誠治．1998「小学校保健授業の教授―学習過程評価票の開発」『学校保健研究』40, 75-81.